

研究結果報告書

研究結果

1949年以降、中国で出版された日本の出版物の題材と数は政治や市場、読者の意識変化の影響を受けてきた。改革・開放前に中国が導入した日本の出版物は主にプロレタリア文学作品と人民史観の著作だった。また、プロ文学導入でも選択が行われた。小林多喜二の「党生活者」は日本共産党の辿った都市革命の路線を反映し、また主人公と母親との間の感情を扱っていたことから、中国語版の出版には困難が伴った。

改革・開放以降は、日本のプロレタリア文学が徐々に流行文学に取って代われ、日本の流行の出版物も市場のベストセラーとなった。日本の出版物の導入は政治主導から市場主導へと変化し、中根千枝の「日本社会」、堺屋太一の「知価革命」、村上春樹の「1Q84」なども出版された。しかしながら日本の出版物導入においては、中国のイデオロギーに合致しない文字はいずれも削除されている。

1990年代以降、中国は日本の学界を反映した出版物の導入に着手する。安丸良夫の「近代天皇観の形成」、東京大学出版会の「公共哲学シリーズ」、読売新聞社編の「検証戦争責任」等が例である。しかし中日両国にはいくつかの問題において依然として意見の違いが存在する。例えば「検証戦争責任」の中国語版では、元の渡辺恒雄の「戦争責任問題」に関する論述が削除されている。

分析により、まず1980年代以前には、中国では例えば日本の学者・中西功等の文革研究といった出版物を出版できず、また導入したとしても相応の削除が行われ、この結果中国では戦後日本の人文・社会科学研究の方向性と思想の内包を正確に解釈することができなかった。

次に、日本の出版物導入においては、「人民」、「民衆」、「市民」といった中心的な概念が順を追って登場する。中日両国の社会変遷には一定の一致性も存在する。中国では1980年代初期に政治的概念としての「人民」という語彙が出版物から徐々に姿を消し、公民や市民という語彙が出現、日本の出版物を受け入れる社会的基盤が徐々に形成されたことがわかる。

最後に、中国における日本の出版物導入からは、東アジアという大きな社会におけるそれぞれ異なる「小さな社会」の分岐や接近のプロセスが見て取れる。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

題名：「戦後日本における知的共同体の変遷」 講演者：諸葛蔚東
会議名：中国科学院学術講演会
日時： 2011年2月25日 場所：中国科学院大学院

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

「戦後日本における知的共同体の変遷」論文発表 発表者：諸葛蔚東
論文掲載誌：「社会学研究」(中国社会科学院社会学研究所)
掲載時期：2010年5月号
「世界史」(中国人民大学) 2010年12月号に転載

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)

「新中国で刊行された日本の出版物の傾向と背景に関する研究」
(仮題) 出版準備中